

笹まくら

丸谷才一



笹まくら

丸谷才一

河出書房新社

笹まぐら ©Saichi Maruya

初版発行 昭和五十年八月十五日

再版発行 昭和五十二年七月二十五日

定価は・帯カバーに表示してあります

著者 丸谷才一

装幀者 駒井哲郎

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話東京三五局五三一（代表）振替東京〇・一〇八〇二

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製本は入念に致しておりますが
万一、乱丁・落丁・汚損のございます時は
最寄りの書店・本社にてお取替え致します

筐
ま
く
ら

装幀

駒井哲郎

香奠こうでんはどれくらいがいいだろう？ 女の死のしらせを、黒い柩に囲まれた黄いろい葉書のなかに読んだとき、浜田庄吉はまずそう思った。あるいは、そのことだけを使った。その直前まで熱心に考えつづけていたのが、やはり香奠のことだから、すぐこんなことを思案したのは心の惰性のようなものかもしれない。

忙しい朝だった。課長は課長会議の席から電話で、いろいろなことを問合せたり、言いつけたりしてくる。ほかにも電話がかかってくるし、来客も多い。それに、出張中のもう一人の課長補佐が受持つ分まで、浜田に仕事がかぶさってくる。彼はそういうことの合間に、ある名誉教授の告別式に包む香奠の額を、庶務課の課長補佐として考えていたのである。その告別式にはたぶん学長がゆくはずだった。

香奠の額は決めかねた。調べてみると、一昨年ある名誉教授が死んだときは一万円で、もともとこれは安すぎるし、その後、物価は非常にあがっている。三万円にふやしても、去年の夏に常勤の理事ではないある理事が死んだときの三十万円とくらべて少なすぎるし、しかし五万円では、多すぎると言って課長が渋りそうだ。課長は認めても、専務理事は判を押さないだろう。それに大学は

企業体なのだから、名譽教授よりも非常勤の理事のほうが遙かに——三十倍も——重要だという考え方も成り立つはずである。そんなふうに何度目かに迷っているところへ、さっきから入口の近くの机で受領年月日のゴム印を郵便物に押しつづけていた使い走りの少女が、浜田あてのものを一束、持って来たのである。昔の恋人で、しかも命の恩人である女の死を告げる、黒い梓の葉書はそのいちばん上にあった。

葬儀の日よりも時刻も、名譽教授のそれと同じで、明日の一時である。浜田は、今日はたぶん無理だから、明日の朝、電報^{がわ}を替で送ればよからうと考えながら、いかにも地方の印刷屋らしいすりへった活字の葉書をもういちど読み直した。病名は伏せてあるが、癌だということは三月^{みづみ}ほど前に来た女からの手紙で察しがついている。彼はその字体の乱れた手紙の、ぜひ何とか都合をつけて来てほしい、もういちど会いたいという文面を思い出し、また、自分の、こちらとしてもゆきたいことは山々だが勤めの身なので思うに任せないという、一週間もかかって書いた、あまり長くない返事のことを思い浮べた。そして、あれ以後もう便りがなかったのは、ボールペンを握る気力も失せたせいなのだろうと想像した。二月から四月までは大学の書入^{かき入れどき}時だから、浜田の手紙に嘘はないし、この三月^{みづみ}ばかりのあいだ彼は、電車のなかとか、会議の最中とか、それから夜、寝つかれずにいるときなどに、いま四国の宇和島では阿貴子がはっきりした意識のままで瘦せほそり苦しんでいるという想念につきまとわれつづけたのである。だが、彼はあの返事を書いてから、一つには忙しさととりまぎれて、一つにはたわいもない慰めの言葉を連ねるのがやりきれないため、見舞状を一本も出さなかったし、それに今こうして死亡通知を手に行っていると、ちょうど五年も十年も中風で寝た

きりの老人が死んだときに家族の者が通夜の席でいただくような、とうとう解放されたという感じが心のなかにあることもまた事実であった。浜田は仄かな解放感を味わいながら、課員の一人がついでくれたぬるいお茶をすすり、以前と違って近頃は戦争のころの夢もめったに見なくなつたし（そう、四五年前までは年に一度か二度、いや、もっとしょっちゅう魘うなされたような気がする。たとえばあの、馬に乗っている男と、地面に坐つてそれを見上げてゐるぼくの夢を見て……）、つまりこうして一つ一つ過去と別れてゆくわけだと考えていた。

このとき課長からまた電話がかかつてきて、一時半からの私学会館の會議に自分のかわりに顔を出してほしい、別に重大な議題はないはずだから、と言いつけられた。課長は五時から専務理事の代理で出かけることになつたため、一日に會議が三つもあるのは辛いというのである。浜田は、課員の一人が前に置いた書類に眼を走らせて判を押しながら、私学会館の件を承知し、どうでもいいような指図を二つ三つ、されるままに聞いた。彼は黒い電話を置いた。そうしなければなおさら、名譽教授の香奠の額を早く決めなければならぬ。しかし、その前にもういちど黒梓の葉書を眺めたとき、彼は意外なことに気がついた。

葉書は「長女阿貴子儀」で始まり「喪主 結城りゑ」で終っている。夫ではなく実母が喪主なのである。浜田はこのことに驚き、それと、あの市立病院から出した最後の手紙の封筒に「結城阿貴子」と元の姓のまま署名してあつたことを思い合せて、あれは病人がつい書き間違えたのでも、昔の恋人のいたわりでもなく、離婚したためなのだと、ゆっくりと判断した。もちろん夫は死んだのかもしれない。阿貴子より十ほど上と聞いていたから、それも有り得ることだ。しかし夫が死んだ

からといって姓が元どおりになるのはおかしいから、これは何か事情があつて実家へ歸つたにちがいない。やはり、あの結婚は失敗だったのである。

彼は年上の女のみじめな死と、それに先立つみじめな結婚とを、悲しむというよりはむしろ、もっと距離を置いた態度で憐れみ、そう言えば最後に会ったときも別れそうな気配があつたと思ひ浮べた。しかし、あれはいつのことだったろうか？ とつぜん上京して来た阿貴子から大学へ電話がかかつて来て呼び出されたのは、一昨年だろいか、それとも一昨昨年だろいか？ まさか去年ではなかつたような気がするけれども。浜田は、彼女と別れてからどれくらい経っているのか、はっきりしないことをもどかしく感じ、四十を越してからの時間の流れ方はじつにおかしなものだと、いつもいづく感想をまた改めていただいた。彼は顔をぼんやりと横へ向けて、去年だろいか、一昨年だろいか、それとも、と一人で思いつづけていた。そばの机にいる課員がその視線を誤解して訊ねた。

「何か……？」

「いや、何でもない」と答えてから、浜田はふと思いついて言った。「法学部長が癌になつて泣いたのは、去年？　一昨年？」

「その前の年の秋」と相手はもうそれだけで笑いだした。「滑稽でしたな、あれは」

商法の専門家としてすこしは名のある法学部長が、胃の具合が悪くなつて検査を受けることになり、入院の前日、自分で料理屋にかけあつたり、理事や教授に連絡をとつたりして、もちろん大学の金でお別れの会を開いたのである。三味線がはいり踊りがある賑やかな会で、年来、学部長と仲

たがいてゐる法学博士は裸踊りまでして座を取り持ったが、当人は一晩じゅうしくしく泣いてばかりいた。女たちはしきりに、「先生、大丈夫よ」と言つて慰め、理事や教授やそれから末席の浜田など十人ばかりの男たちは、その言葉がうまく口に出なくて、酒好きな商法学者にただむやみに酒ばかりすめ、盛りつぶした形になった。当然、浜田が送り届ける役にまわったが、タクシーのなかでも泣かれたり喚かれたりしてさんざんてこずり、これから銀座へゆこうとか、中野新橋へゆこうとか言うのをなだめすかして、ようやく家へ帰り着くことができたのは一時ごろだったろうか。それなのに、一週間ほどしてから法学部長はけろりとした顔で出勤し、検査の結果を誰にも報告せず、いたって元氣な様子で、会議の席では例の法学博士といがみあいをつづけているのである。

「いやあ、あれには参った、参った」と課員がまた笑いながら、「先生、御病氣のほうはいかがでございますか、と廊下で訊いたら、ははは、大分デマが飛んでいるようすな、と言うんだから」「デマとはねえ」と呟いて無理にはほえみながら、浜田は、阿貴子から電話があつたのはあの翌日だった、見違えるほど肥っていたし田舎くさく見えた、と考えていた。

「ケンちゃん……」と言いかけてから阿貴子は、「あ、つい昔の癖が出てしまふ」と笑う。

「いいさ。何も変えることはないもの」と浜田も笑った。修学旅行の中学生たちが、走りまわったり大声でしゃべったりしているので、ずいぶん大きな声を出さなければならない。言葉の調子から推してたぶん熊本の子供たちなのだろう。こんなに大勢が熊本弁で賑やかに話しあうのを聞くのは本当に久しぶりだ。

「ねえ、奥さんは庄ちゃんて呼ぶ？　庄吉さん？　庄さん？」と阿貴子が訊ねた。

昔の恋人同士が十年以上も経ってから、二十年近くも経ってから、再会し、こんな場所であんなに大声で話をする。まるで金婚式をすませた、耳の遠い夫婦の東京見物のように。しかし、この女は昔からこんなにおかしなアクセントで話をしたろうか？　こういう田舎なまりにおれは平気だったのだろうか？　いいさ、何も変えることはない。あらゆるものがみんな変ってしまった。

「さあ、どう言ってるだろう？　庄ちゃんとは言わないな、とにかく」

「ふうん」と彼女の白い顔がうなずくのが、半透明の灰いろのビニールのような淡い闇のなかに見える。「そうそう、十円玉あります？」

間接照明の作る闇に包まれている二人のそばに、もういちだん濃い闇に包まれて望遠鏡があった。浜田は硬貨を黒い孔に入れた。阿貴子は眼を望遠鏡に当て、部品をさまざまにいじった。彼は窓越しに雨の夜空を眺めた。東京の夜をこんな高さから見ると機会はたぶんもうあるまい。今日この女が行ってみたいと言いださなければ、一生ここへは来なかったにちがいない。昔ぼくはよく、はじめての町やはじめての村へゆくと、もう二度とここへは来ないだろうな、と考えたものだ。昔の女が昔の癖を誘いだす。

「見えない？」

「見えない。真暗なのよ」

「おかしいな」

ぼくは今、黒い東京の夜のへりを、ネオンサインが一瞬ごとにさまざまな色で塗るかえるのを見ているのに。それなのにこの女には何も見えないなんて。浜田は望遠鏡の向きを上下に変えてやっ

た。

「見えない？」

「ええ、ちっとも」

浜田がくすくす笑いだした。望遠鏡を支える鉄のパイプの下の方に、「故障」と書いた木札が吊ってあったのだ。阿貴子は、背中をつつかれて、その二つの文字を読んだ。

「ひどいわねえ。十円、惜しいことをした。返してくれないかしら？」

「あきらめるさ」

「惜しいわ。癪にさわる」と阿貴子はくりかえし、あたりを見まわしたが、塔の従業員らしい者は、エレベーターに案内する係の娘が明るい光の下にいただけ。しかもその娘は客たちをさばくのにな常に忙しそうだ。

「あんなに気前がよかったくせに」

「あら、ケチすぎたのよ、あのころのケンちゃん。無理もないけれど」と彼女は弁護するように言って、「昔の十銭、今の十円よりずっと値打があったわね」

「あったな」と浜田は呟いてから、厚いガラスと降りつづける雨のむこうの灯のかたまりを指し、

「あれが新宿、あれが渋谷。六本木かもしれない。ちょっと待てよ。六本木はあのすこし手前の、ぼうつと光ってる所じゃないかな。あれが池袋だろう」と説明し、今度は右のほうを向いて、「まっすぐ前の黒い所が東京湾」

「すると、あれは船？」

たしかに船ではないように見える。広い黒い面積にまばらに散らばっている数えきれないくらいの灯りを、東京湾の船の群れだと思うのはなかなかむずかしい。五つか六つの星から、大熊だとか、乙女だとか、天秤てんびんだとか、そんな連想をすることのほうがまだしもやさしい。

「うん、船がたくさんいて、とてもきれいだと聞いてたけれど、大したことないね」

「雨のせいかしら？」

「まさか」

「でも、寒いでしょうね」

「寒いだろうな。遊びに出かけている奴はいいが、留守番は大変だ」

本当は、金のない者が残って、端はした金を賭けてポーカーかダイスをしている。なかには、つかまることがこわくて上陸しない奴もいるかもしれない。寒くて金がない、やりきれない日。しかし彼らはともかく、毎日の食事だけは保証されているし、甲板へ出さえしなければ寒くもないわけだけども。

とつぜん阿貴子が言った。

「家出みたいなものなのよ、半分は」

「半分？」

「気が晴れたら帰ろうと、最初から思ってるの」

「なるべくなら、そうしたほうがいいな。ヤケを起すのはよくない。喧嘩したのかい？」

彼女は黙っていた。